

2024

教育に科学を！

子どもの発達科学研究所のいじめ対策

公益社団法人 子どもの発達科学研究所 和久田学



公益社団法人 子どもの発達科学研究所とは・・・

私たちは子育て、教育の現場に科学を提供します

子どもの発達科学研究所では、「発達を科学する」ことにこだわり、これまで保守的で、個人の経験や知識・スキルに負うことが中心だった学校教育、発達支援の現場に科学を持ち込みます。すなわち、単なるアンケートではない、科学的根拠に基づいた調査の実施と、その解析結果に基づいた質の高い支援を実現し、子どもたちの健全な発達を守ります。こうした科学的根拠に基づく実践は、広く社会全体で共有される知識となり、あまねく社会全体の発展に貢献します。

【実績】（抜粋）

- **東京都品川区、いじめ予防にかかわるプロジェクト：**
『いじめ予防プログラムトリプルチェンジ』を展開、学校風土調査、NiCoLi、デイケンなどの調査ツールを導入
- **文部科学省委託事業、不登校要因調査：**
山梨県、宮崎県延岡市、大阪府吹田市、広島県府中市の教育委員会の協力を得て、調査研究を実施。
- **その他、静岡市、西宮市、湖西市、吹田市、館林市など、多くの自治体、教育委員会の依頼を受けて：**
専門機関として教育研修、市民啓発、調査等の事業を実施。



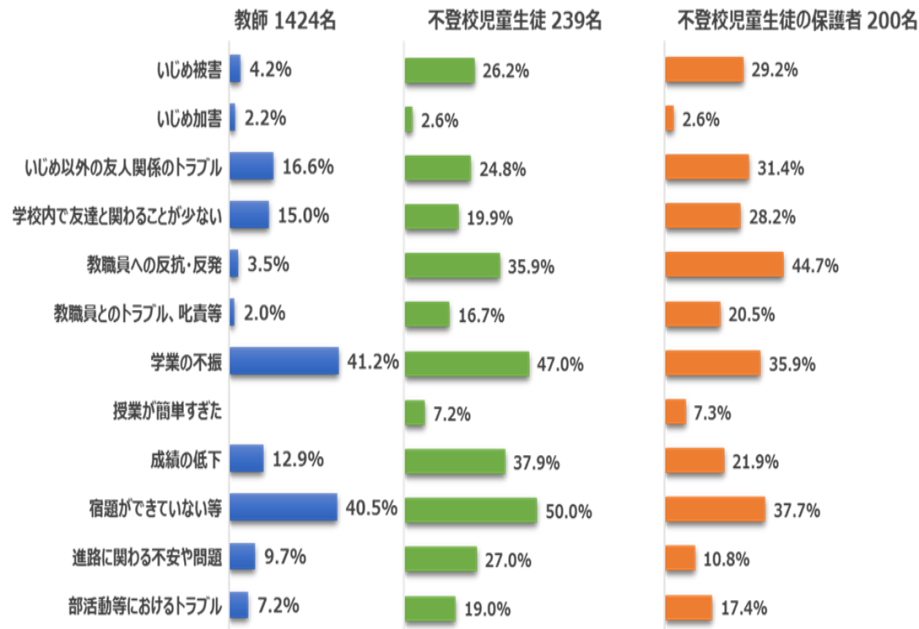
子どもの発達科学研究所の重点

1. 科学の重視
2. 包括的視点
3. 予防を中心としたRTIモデルの採用
4. 社会実装で社会を変える



1.科学の重視

- 科学とは、再現性の確保であり、データ主義である。
- 私たちは、どうしてもバイアスがかかってしまう。
- 特に「いじめ」のような、誰もが体験することは、それぞれの経験則に傾きがち。
- だからこそ、世界の研究を参考にし、科学的視点で物事を捉えている。



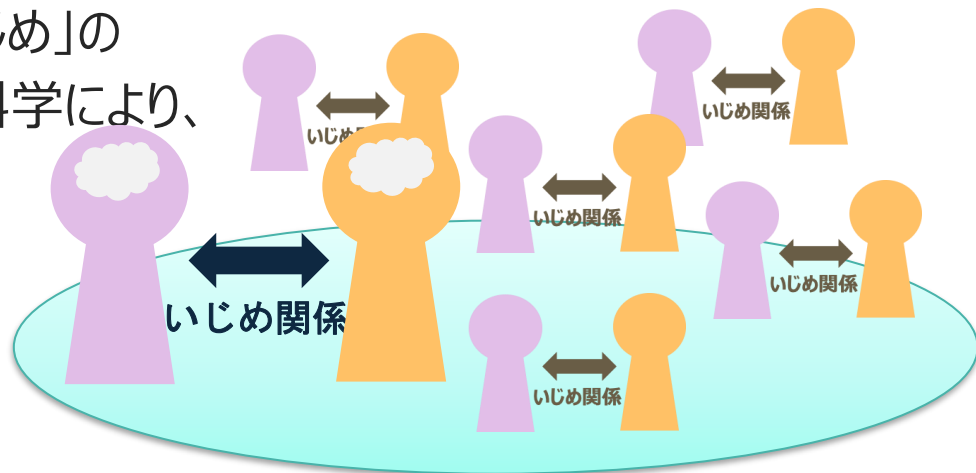
文部科学省委託事業・不登校要因調査
(子どもの発達科学研究所、2023)

不登校の児童生徒の26.2%がいじめ被害を訴えているが、教師が把握しているのは4.2%に過ぎない。



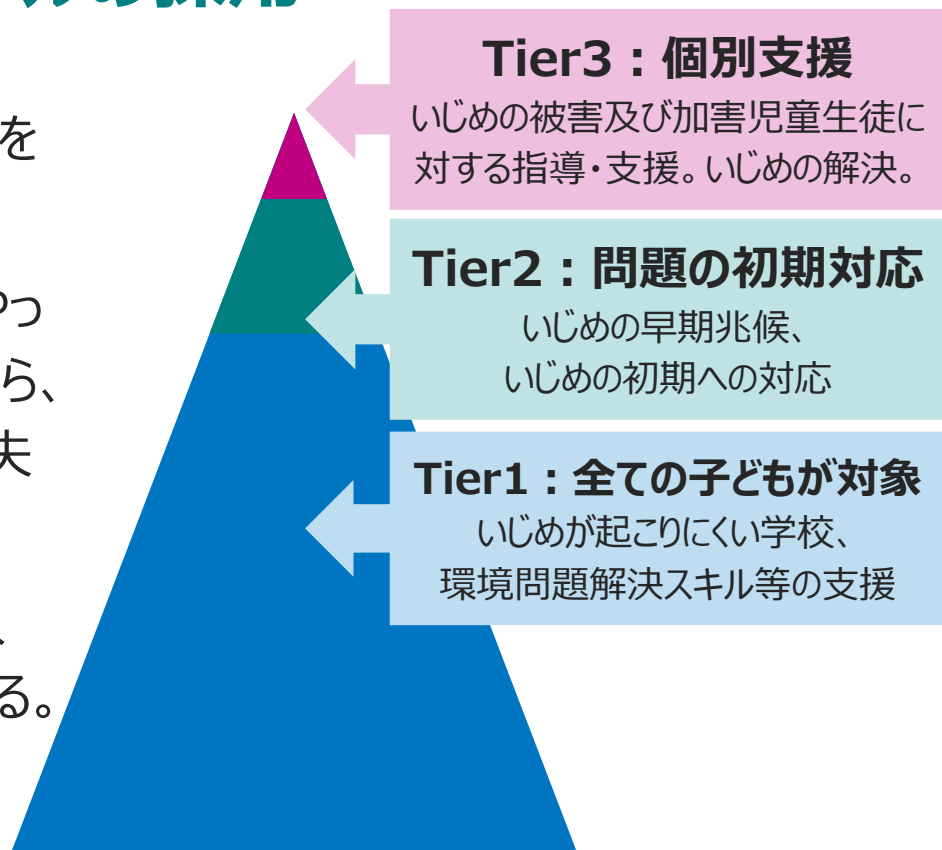
2. 包括的視点

- 1つの領域、分野にこだわることなく、様々な視点を持つ。
- 例えば、「いじめ」についても、データを用いた疫学統計学だけでなく、行動科学、脳機能モデルなどを駆使して、その全体像を捉える。
- すなわち、疫学統計学を用いて、「いじめ」のリスクの高い環境を明らかにし、行動科学により、具体的支援策を明らかにする。
さらに脳機能モデルにより、子どもの特性をアセスメントしつつ、個別の支援を行う。



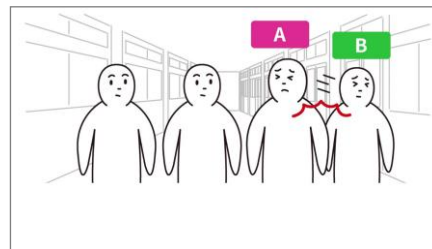
3. 予防を中心としたRTIモデルの採用

- 私たちは、「いじめ」など、見えている問題を解決することを重視する。
- それはとても大切なことだが、それだけをやっている、問題は起こり続ける。（なぜなら、「問題が起きてからの支援」＝「子どもの失敗を待つモデル」だから。
- よって、私たちは、予防・早期発見・介入支援の3段階で行うRTIモデルを採用する。



4. 社会実装で社会を変える!!

- 研究は、社会実装（現場で使える状態にする）しなければ意味がない。
- 社会実装をするためには、プログラム化、教材開発、トレーニングの実施、効果測定（本当に効果があるのか、新たなエビデンスの創出）が必要。
- 今回の「こども家庭庁・学校外からのアプローチによるいじめ解消の仕組みづくりに向けた手法の開発・実証事業」では、効果測定、横展開が可能なパッケージ化を求められている。



文部科学省HP https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1406070_00001.htm

